

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第33号 (2007年10月1日発行)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001928

国語研の窓

33号

平成19年10月1日 第33号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所管理部総務課
普及広報担当グループ
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
電話 042-540-4300 FAX 042-540-4334
URL <http://www.kokken.go.jp/>



『日本言語地図』『方言文法全国地図』作成に使用したスタンプ

もくじ

- 暮らしに生きることば 1
- 研究室から：分かりやすい言葉遣いの提案 2
- 国立国語研究所における国際交流 4
- 第14回国際シンポジウム報告 5
- 博報日本語海外研究者招へいプログラム 6
- 新刊 6
- 文字さんぼ 7
- 第11回日本言語文化研究会報告 7
- お知らせ：「ことば」フォーラム 8
- 表紙のことば 8

暮らしに 生きる ことば

「やさしい日本語」が外国人の命を救う

12年前の阪神淡路大震災では、外国人被災者に向けた英語での情報提供が発生から半日後に始まりました。しかし、英語がわからない外国人も多く、英語だけによる情報伝達には限界がありました。

経験上、災害発生後72時間が被災者の生死に強く関わっていることがわかっています。その間に、災害情報をすべての外国語で提供できればいいのですが、時々刻々と変化する被災情報を瞬時に多くの外国語に翻訳することはとても困難なことです。

そこで数年前から、ことばの異なる多くの在日外国人被災者に、できるだけ早く簡潔に災害情報を伝えるための方法として、「やさしい日本語」を使おうという提案がなされています。「やさしい日本語」は特別な日本語ではありません。「難しい語彙を使わない」「文の構造を簡単にする」「重要度が高い情報だけに絞り込む」「災害語彙にはやさしい日本語を添える」などの簡単なルールによって作り出される表現です。この提案は言語研究者やマスコミ・

行政に携わる人たちを中心とした研究グループから発信されました。グループでは多くの外国人留学生の協力を得て「やさしい日本語」の有効性を実験により検証しています。



弘前公園に設置された案内板

地方自治体やNPOで、「やさしい日本語」を使って災害時の被害を最小限に食い止めようとする取り組みが始まっています。また、「やさしい日本語」をよりわかりやすいものにしようという研究も継続されています。語彙、文法、表現を充実させる取り組み、災害ニュースの読み方など音声による情報伝達の指針作成、パソコンによる「やさしい日本語」自動生成プログラムの開発など、一人でも多く外国人の命を救うため、このグループが中心となって、より豊かな「やさしい日本語」を育てる努力が行われています。

<http://www2.kokken.go.jp/gensai/>

(米田 正人)

分かりやすい言葉遣いの提案

『公共媒体の外来語 — 「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』を発行しました

「外来語」言い換え提案

国立国語研究所では、平成14年8月から平成18年3月まで、有識者からなる「外来語」委員会を設置し、「『外来語』言い換え提案—分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫—」という活動を行ってきました。

これは、公共性の高い媒体に、国民にとって分かりにくい外来語が氾濫^{はんらん}している現状を改善することを目指すものでした。外来語を言い換えたり説明を付けたりする、分かりやすい言葉遣いの工夫を具体的に検討し、省庁や地方自治体、報道機関などに対して、提案を行いました。

4回に分けて提案を発表した後、総集編をまとめ、『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』（平成18年6月、ぎょうせい）という本を刊行しました。インターネットでも提案内容を公表しています。

この活動を行うのと並行して、国立国語研究所では、公共性の高い媒体において、分かりにくい外来語がどのように使われているか、また、外来語に対する国民の意識はどのようなものであるかを把握する調査研究を実施してきました。その調査データは、委員会に提出し、「外来語」言い換え提案を支えてきましたが、調査研究の成果自体を公表してほしいという要望も、多く寄せられていました。

調査研究の報告書の発行

「外来語」言い換え提案を支えてきた、国立国語研究所による外来語に関する調査研究の成果を、平成19年3月に、報告書『公共媒体の外来語 — 「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』として発行しました。この報告書は、次の3部からなっています。

- 第1部 「外来語」言い換え提案で取り上げた外来語
- 第2部 外来語についての世論調査と分析例
- 第3部 コーパスを活用した外来語の研究

第1部は、「外来語」言い換え提案で取り上げた176の外来語一つ一つについて、使用頻度や国民への定着度の調査結果をグラフと解説にまとめました。

また、分かりにくさの要因や、分かりやすく言い換える工夫について、委員会で論点となったことを記しました。言い換え提案を行うために、個々の外来語の使用実態やコミュニケーション上の問題を詳しく把握し、多角的に検討した成果が一望できます。

第2部は、国民数千人に対して実施した数種の世論調査についての概要を報告し、調査データを活用した論文を3編載せました。実施した世論調査は、個々の外来語の国民への定着度や、外来語に対する国民や自治体職員の意識をとらえようとしたものです。各調査の結果は、すでにインターネットなどで公表していましたが、今回は論点を絞り込み深く分析することを試みました。各論文は、外来語が引き起こすコミュニケーション上の問題が、現代社会における根深い言語問題であることを示しています。

第3部には、公共性の高い媒体である、白書、新聞、広報紙などに、外来語が実際にどう使われているかに関して、種々の視点から記述した論文を9編収録しました。「コーパス」と呼ばれる大量の電子化資料を、コンピューターを使って分析する、新しい研究方法に基づく論文をそろえました。この方法を採用したことによって、規模の大きさと精密さの点で従来の外来語研究を超えるレベルに到達することができました。

報告書の閲覧・入手の方法

この報告書は、市販をしていませんが、同じ内容を国立国語研究所のホームページに掲載し、閲覧や活用の利便に配慮しました。次のアドレスに掲載した内容を御覧ください。

<http://www.kokken.go.jp/public/gairaigo/Report126/report126.html>

また、冊子版の入手を希望される方には、国立国語研究所から送付します。その入手方法も、上のアドレスを御参照ください。

この報告書が、「外来語」言い換え提案とともに、分かりにくい外来語の問題を考えるための資料として、様々な立場の方に活用されることを、願っています。

「病院の言葉を分かりやすくする提案」(仮称)を企画しています

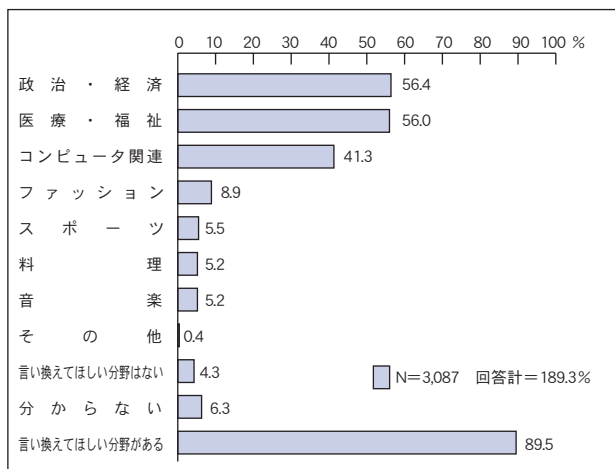
「外来語」言い換え提案を継承する活動

左のページで述べた、「外来語」言い換え提案は、役所や報道機関で使われている分かりにくい外来語について、国民に分かる言葉で言い換えたり説明を付けたりすることが大切であるという認識に立ったものでした。誰にでも分かる言葉で説明するための具体的な工夫を、情報を発信する側の指針として役立ててもらえるように、提案したものです。

この活動を行うなかで、国民にとって分かりにくい言葉の中心は専門用語であること、専門用語を分かりやすくするためには、その分野の専門家による言い換えや説明の努力が欠かせないことが、分かってきました。そこで、「外来語」言い換え提案を継承し、発展させる活動は、分野を限り、その分野の専門家を巻き込んだ活動にすることを考えました。

病院の言葉は分かりにくい

国立国語研究所が国民4,500人を対象に行った世論調査で、どの分野の外来語を言い換えてほしいかを質問したところ、図のような結果が得られました。



「政治・経済」と並んで、「医療・福祉」の分野がもっとも多くなっています。世論調査では、医師が患者や家族に話すとき、言い換えたり説明を加えたりしてほしい言葉についても質問しましたが、国民の約85%が、医師に対して、言い換えたり説明を加えたりしてほしい言葉があると回答しています。このように、病院などで見聞きする医療の言葉は、国民の多くが分かりにくいと感じ、医師などの専門家に対して、言い換えたり説明を加えたりしてほしいという希望をもっています。

こうした調査の結果もふまえ、分かりにくい専門

用語を分かりやすくする工夫を提案する活動の対象を、医療の分野に定め、医療に従事する専門家と協力して、問題の改善に取り組むことにしました。

医療をめぐる状況の変化

医療の専門用語を分かりやすくしてほしいという国民の希望が強い背景には、近年の日本社会の変化があると考えられます。個人の価値観が尊重され、国民一人一人が生活に必要な情報を自ら集め、理解し、判断することが重要になってきています。これまでは、専門家の判断に任せがちであったことがらについても、自らの責任において決定を行うことが求められる社会に変わってきているのです。とりわけ、病院で診療を受ける場合、患者が病状や治療について、医師や看護師など医療従事者の説明を理解し、一人一人が自らの医療を選択することが求められてきています。

分かりやすい説明の手引きとして

患者にとって分かりにくい専門用語を、患者が的確に理解できるようにするには、何よりもまず専門家である医療従事者が、専門家でない患者に対して、分かりやすく伝える工夫をすることが必要です。医療従事者が分かりやすく伝えようと努力することで、患者の理解しようとする意欲も高まるはずで

そこで、医療従事者が患者に分かりやすく説明しようとする際に、参照できる手引きとなるものを提供することを目指し、「病院の言葉を分かりやすくする提案」(仮称)を企画しました。

「病院の言葉」委員会の活動予定

この提案を行うために、国立国語研究所に「病院の言葉」委員会を設置します。委員会は、医師、看護師、薬剤師などの医療従事者と、ジャーナリスト、報道機関の専門家、言語学者などの言葉の専門家を中心に、二十名余りで構成します。

平成19年4月に準備委員会を設置し、検討のための基礎的な調査研究に着手しています。10月からは、正式な委員会を発足させ、検討を本格化させます。検討の結果は、まず中間発表を行い、様々な立場からの意見を聞き、再検討を行い、本発表としてまとめていきたいと思

います。中間発表は平成20年の秋、本発表は平成21年の春を予定しています。

(田中 牧郎)

国立国語研究所における国際交流

国立国語研究所の中期目標には、「現代日本語の専門研究機関として積極的貢献を果たすための内外関係機関との連携協力」ということが記されています。海外との連携としては、次のことを行っています。

- ① 海外の研究者の招へい
- ② 海外の研究機関への研究員の派遣
- ③ 海外の研究機関との学術交流協定の締結
- ④ 国際シンポジウムの開催

国際シンポジウムについては、これまでも「国語研の窓」で紹介されているので、以下では①～③について紹介します（8月に開催した国際シンポジウムの報告が右ページにあります。あわせて御覧ください）。

① 海外の研究者の招へい

注目すべき研究を行っている海外の研究者が、国語研究所で研究を行うとともに、研究員との意見交換を行うものです。今年度は、マルコ・バローニ氏（イタリア・トレント大学）を招へいし、コーパスに基づく語彙研究、特に日本語の語彙における意味の構造化のあり方（semantic space）について講義を行っていただきました。

② 海外の研究機関への研究員の派遣

研究員が海外の研究機関に滞在し、研鑽けんさんを積むものです。今年度は、研究開発部門の小磯花絵研究員がアメリカ・コロンビア大学に滞在し、Julia Hirschberg 教授のもとで、会話のスタイル、特に話者交替に関する日英対照研究を行いました。



国立国語院キム・ドクホ研究員の講演会

③ 海外の研究機関との学術交流協定の締結

現在、韓国の国立国語院（ソウル市）、中国の北京日本学研究中心（北京市）、華東師範大学（上海市）の三機関と学術交流協定を結び、報告書等の交換、研究員の相互訪問、シンポジウム参加などの交流を行っています。

国立国語院は、韓国語及び韓国国民の言語生活に関する科学的な調査研究と言語政策の立案を行う政府直轄機関です。以前は国立国語研究院という名称でしたが、2004年に拡張・再編され、国立国語院となりました。言語政策部、言語生活部、言語振興教育部の三部門から成り、代表的な刊行物に『標準国語大辞典』があります。



交流機関と研究報告書・資料等を交換

北京日本学研究中心は、日本研究及び日本との交流に携わる人材の養成のために、1985年に日中合作事業として設立された教育研究機関です。前身である「在中国日本語研修センター」（1980～85年）から数えると四半世紀以上の歴史を持ち、中国の日本研究の拠点として重要な役割を担っています。

華東師範大学は、中国の重点大学の一つで、幅広い分野に関する教育と研究が行われています。中国における日本語教育の中心の一つでもあります。

海外の研究者や研究機関との連携協力は、「自らの研究レベルの向上」、そして「海外の日本語研究の支援」という二つの点で非常に重要です。世界で唯一の現代日本語の専門研究機関として、海外の研究者や研究機関との連携協力の重要性は、今後ますます増すことになるでしょう。（井上 優）

第14回 国立国語研究所国際シンポジウム「世界の言語地理学」

第14回国際シンポジウムは、2007年8月22日と23日の二日間にわたり、都心にある灘尾ホール(新霞ヶ関ビル)において開催されました。今回のテーマは、「世界の言語地理学」です。

両日、午前10時から午後5時までという長時間にわたるもので、しかも35度を超える酷暑の中での開催でしたが、二日間とも約120名の方々が参加され、熱心な議論が交わされました。

日本では、国立国語研究所が全国を対象として調査・編集・出版した『日本言語地図』『方言文法全国地図』のみならず、各地で400冊以上にのぼる言語地図集が作成されており、日本の言語地理学は質量ともに多くの成果をあげてきました。今回のシンポジウムは、世界各地の調査ならびに研究の状況を把握しながら、このような日本の成果が、世界的に見た場合、どのように位置づけられるのか、また、これから何が求められるのかを考える良い機会となりました。

シンポジウムの両日、それぞれにサブテーマを用意しました。初日は、「各地の言語地図作成状況」で、世界各地で言語地図が作成されてきている状況を把握することをねらいます。二日目は、「言語地図の活用方法」で、作成された言語地図の利用方法をめぐって議論します。

今回のテーマに合わせて研究発表を行ったのは、以下の方々です。()の中には対象地域・所属を示しています。なお、日本は大西が担当しました。

李相揆氏 (韓国・韓国国立国語院)

岩田礼氏 (中国・金沢大学)

ヨアヒム・ヘルゲン氏 (ドイツ・マルブルグ大学)

ハインリッヒ・ラミッシュ氏 (イギリス・バンベルグ大学)

マリアピラル・ペレア氏 (スペイン・バルセロナ大学)
また、サブテーマに合わせて、初日には真田信治氏 (大阪大学) に「日本で編み出されたグロットグラム」、二日目にはハンス・ゲーブル氏 (ザルツブルグ大学) に「Dialectometry (方言計測学)」と題した招待講演をお願いしました。

さらに、それぞれの発表・講演を整理するため、初日には福嶋秩子氏(県立新潟女子短期大学)から、二日目にはデビッド・ヒープ氏(西オントリオ大学)からコメントをいただきました。

両日ともに、発表・講演・コメントをもとに、当日の登壇者全員による全体討論を1時間半かけて行うセッションを設けました。このセッションを通して、相互理解を深めるとともに、テーマ・サブテーマをめぐる議論を進め、また、壇上とフロアとの間での質疑応答も行うことで、シンポジウム参加者全員で、世界中の言語地理学に関する、個別の、また、普遍的な問題と方向を把握することをめざしました。とはいえ、シンポジウムだけでは、時間は十分ではありません。シンポジウム終了後も、会場を変えて、夜遅くまで、個別に議論や情報交換が続けられました。

世界各地の言語地理学者が集まるこのような大規模な会合が開催されたのは、日本では初めてのことです。今回のシンポジウムを通して、日本の言語地理学の成果を発信するとともに、世界中の言語地理学研究者の皆さんと研究情報のみならず人間同士の交流も行われ、有意義な二日間でした。同時に、世界の言語地理学をリードする役割が、日本の研究者に期待されていることをあらためて認識するに至った暑い夏でした。(大西 拓一郎)



博報日本語海外研究者招へいプログラム

国立国語研究所は、財団法人博報児童教育振興会の「博報日本語海外研究者招へいプログラム」に協力しています。このプログラムは、海外において日本語、日本語教育を研究し、特段に優れた研究業績を有し、当該分野で指導的な立場にある研究者を日本に招へいし、国立国語研究所で研究・調査等を行う機会を提供し、これらの研究活動・交流を通して、我が国の当該研究分野及び国語教育の更なる発展に寄与するとともに、教育基盤の充実に資することを目的としたものです。

第1回招へい者（招へい期間：2006年10月より6か月～1年間）

招へい者／所属機関	研究タイトル
任 栄哲／中央大学校文科大学（韓国）	韓日のコミュニケーションのあり方に関する研究
成山重子／メルボルン大学（オーストラリア）	日本語の項省略と日本文化：日本語学習者のために
重盛千香子／リュブリャーナ大学（スロヴェニア）	日本語とスロヴェニア語の使役のコーパス対照分析
曹 大峰／北京外国語大学北京日本学研究センター（中国）	教科書コーパスを活用した新しい日本語教材開発のための基礎研究—中国語話者向けの日本語教育文法の再構築—
WLODARCZYK Andre／シャルル・ド・ゴール大学；ソルボンヌ大学（フランス）	日本語の発話における情報とメタ情報構造

第2回招へい者（招へい期間：2007年10月より6か月～1年間）

招へい者／所属機関	研究タイトル
桶谷仁美／イースタン・ミシガン大学（アメリカ）	バイリンガル児を育てる—日本における外国人幼児・児童・生徒への日本語教育のあり方 再考—
Vorobieva Galina／キルギス共和国日本人材開発センター（キルギス）	非漢字文化圏の日本語学習者を対象とした漢字教育法の開発—漢字の書記素と構成要素の分析に基づく最適な漢字学習配列および連想を手がかりとした漢字記憶法の開発とその利用について—
NGO HUONG LAN／ベトナム社会科学院附属東北アジア研究院（ベトナム）	「日本研究者のための日本語」初・中級会話教材作成
Walid Farouk Ibrahim／カイロ大学（エジプト）	機能語を中心に日本語とアラビア語の対照研究—アラビア語話者のための日本語表現文型集の作成に向けて—
Yasu-Hiko Tohsaku／カリフォルニア大学サン・ディエゴ校（アメリカ）	日本語学習のための効果的なアセスメントのデータベースとその汎用システムの構築

新 刊

『日本語科学』第22号 特集「コーパス日本語学の射程」のご案内

近年、国内外で「コーパス（言葉を大量に集めたデータベース）」の開発が進み、コーパスに基づく言語研究の試みが始まっています。今後は、教育現場での活用、辞書や文法書の編集、言語処理技術への応用など、コーパスを利用した日本語研究の可能性がさらに広がっていくでしょう。そこで、『日本語科学』22号では、「コーパス日本語学の射程」と題した特集を掲載します。今後、どのようなコーパスが開発されるべきか、それらは日本語研究にどのような影響を及ぼすか、などのテーマについて、様々な立場から論じた論文を集めることにより、今後の「コーパス日本語学」の振興と発展に寄与したいと思っております。どうぞご期待ください。

2007年10月/国書刊行会/B5判横組み212ページ/税込3,150円



異体の仮名

街を歩いていたら、次のような看板に出会いました。さて、この看板が出ているお店では、いったい何を売っているのでしょうか。

(1)



(3)



(2)



2007年3月八王子市内で撮影

(1)から(3)の看板は、実際に街の中にあったものです。それぞれに異体の仮名—いわゆる「変体仮名」が使われています。

平仮名は漢字の草書体からできています。「あ」は「安」, 「い」は「以」, 「う」は「宇」のように、平仮名には元の漢字があります。元の漢字が異なるものや、元の漢字からの草体化（崩し方）の程度が異なるものは、「変体仮名」と呼ばれます。

(1)は「せんべい」で、3文字目に「へ」、4文字目に「い」をあらわす「変体仮名」が使われていま

す。「**へ**」の元の漢字は「遍」です。「部」からできている「へ」とは、元の漢字が異なります。一方、「**い**」の元の漢字は、「い」と同じ「以」です。こちらは草体化の程度が異なるものです。

(2)は「しるこ」と読みます。1文字目は「し」、3文字目は「こ」の「変体仮名」です。「**志**」はほとんど草体化されておらず、元の漢字と同じ形です。「変体仮名」と漢字とは、字形だけでは区別ができない場合があります。現代の平仮名は、元の漢字と大きく形が変わっているので、漢字とは別の文字種を形成しているように見えます。しかし、「変体仮名」を見ていると、漢字の意味を使わずに漢字の音だけを用い、元来は漢字の一用法であった仮名の本質を確認することができます。なお、「**ふ**」の元の漢字は「古」です。

(3)は、右から順に「きそば」と書いてあります。「**き**」は「楚」, 「**そ**」は「者」が元の漢字です。東京の蕎麦屋では、この表記を暖簾に使うことが多いようです。

大学生に冒頭の質問をすると、「せんべい」「しるこ」「きそば」と答える学生は、極めて少ないです。看板なので、一見して理解できない文字を使うのは望ましくないかもしれませんが、何かわからないので、かえってじっと見つめてしまう効果があるのかもしれません。(高田 智和)

第11回日本語文化研究会を開催しました

国立国語研究所では、政策研究大学院大学、国際交流基金日本語国際センターとの連携大学院プログラム「日本語教育指導者養成プログラム（修士課程）」及び「日本語文化研究プログラム（博士課程）」を平成13年10月より実施し、世界各国において指導的な立場で活躍できる日本語教師や研究者、日本語教育行政の実務担当者などの育成に取り組んでいます。日本語文化研究会は、同プログラムの在学学生、修了生、そして教員を中心とした研究会です。9月11日（土）に開催された第11回研究会（国立国語研究所講堂）では、修士課程に在籍する外国人日本語教師7名が1年間の研究成果を発表し、参加者との間で熱心な質疑応答が交わされました。



「映像作品から話しことばを考える—国語・日本語教育の現場で—」

～平成19年度 教育・文化週間 参加事業～

国立国語研究所が制作した「ことばビデオ」という映像作品の、教育現場での活用事例を紹介しながら、その活用の広がりや可能性について考えると共に、広く映像とことばの関係を考えます。

講師は、清ルミさん（NHK教育番組「新にほんごでくらそう」に担当講師として出演）、中神智文さん（「ことばビデオ」制作委員。2005年まで文化庁国語課に専門職として勤務）、杉戸清樹（国立国語研究所長）の3名です。

入場無料。ただ今、参加申し込み受付中です。

【申し込み方法】

国語研究所ホームページ (<http://www.kokken.go.jp/>) からお申し込みください。

「ことば」フォーラム係 TEL：042-540-4300(代) FAX：042-540-4456 でもお受けしています。

日 時：2007年11月2日（金）

午後1時30分（1時開場）～4時30分

場 所：アクロス福岡 西ウイング7階

大会議室（定員200名）

福岡市中央区天神1-1-1

内 容：国語教育の現場での活用を考える

中神智文（福岡県立朝倉高等学校）

日本語教育の現場での活用を考える

清 ルミ（常葉学園大学）

映像作品の活用と可能性について考える

杉戸清樹（国立国語研究所長）

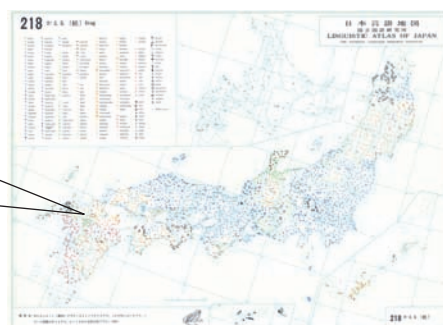
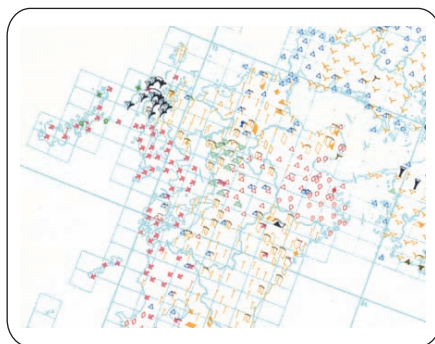


表紙のことば

国立国語研究所は、設立以来、方言の研究に取り組んできました。中でも『日本言語地図』全6巻（1974年完成）と『方言文法全国地図』全6巻（2006年完成）はその代表的な研究成果です。

この二つの地図集の作成には、表紙の写真のようなゴム印が活躍しました。ゴム印は、地図の上でことばの形を記号化して表現するために用いるものです。たとえば下の地図は「蛙を何と呼ぶか」を表すのですがKAERUと言う地点には△(水色)の記号が置かれています。しかし場所によって呼び方が違うことは、同じ地図にその他のいろいろな記号が置かれていることからわかります。記号はゴム印を用いて白地図に手作業で押して、印刷のための原稿地図を作ります。ここに載せた地図はそのようにして作成された一例です。

『方言文法全国地図』の第5集からはコンピュータにより地図が作成されることになり、ゴム印の役割は終わりました。



『日本言語地図』第5集218図「かえる（蛙）」より九州の北部を拡大